

# 経営と暮らしのあらがると

## 災害対策

### 第1回 災害はタイミングを選んでくれない

東日本大震災でこれまでの日本におけるさまざまな「安全神話」が崩壊し、首都直下地震の発生確率や被害想定が大きく見直される一方、これまで鳴りを潜めていた日本各地の火山活動・噴火活動も活発化し、なに

その後、「あの日」のことを忘れず、公私ともに災害対策を進めてきました。今では、全国各地のコンビニートや工場や中小中堅企業の皆さまを対象に、経営者の視点と現場感覚の両面から見た防災・事業継続・危機管理などについて、BCP(事業継続計画)や実践型の防災訓練の指導などをさせていただいています。

あの日以来、筆者は災害・危機管理を常に身近なものとして感じるようになったのです。

2011年に発生した東日本大震災のケースと違って、阪神大震災では津波の被害よりも火災延焼と耐震性が低い建物の崩壊によって多くの方々がなくなりました。筆者が当時住んでいた実家の柱も大きく曲がり、全損は免れましたが建て直しをすることになりました。建物の耐震性や耐火性は当たり前ながらも改めて重要だと肌身で感じ、

筆者が今も昨日のこのように覚えている日があります。高熱で寝込んでいた早朝に、背中を蹴り上げられるような強い衝撃——激しい揺れを受けて飛び起きたその日こそが、20年前の1月17日、つまり阪神淡路大震災の日でした。

### 現実化する「悪夢の天秤」

中小中堅企業においては、「いつやってくるかわからない災害より、明日やってくる支払期日の請求書の方が大問題だ」というように、目先の物事にとらわ

「想定外のリスク・災害」は、これでもかというほど都合の悪い時に突如として、「同時多発リスク」(地震に加え火災・津波、ライフラインの損壊、事故、事件など)という形で重なってやってくるものなのです。リスクは常に唐突に、しかも組み合わせたかたちで具現化すると、筆者は常に言い続けてきました。

「30年以内に〇%の確率で大災害が起こる」というとき、希望的観測や願望からか、「30年先に〇%の確率で大災害が起こる」と都合よく解釈をされる方々が少なくありません。しかし確率論的には、明日あるいは来月にその大災害が起こっても、「今日という日から30年以内」に大災害が起こったことに違いはなく、大災害が経営の資金繰りの都合や私生活のスケジュールに合わせて日程をずらしてくれることはありません。むしろ

やら「災害時代」を想起させるようでもあります。本連載では、東日本大震災や各種の災害から得た教訓を基に、皆さまに災害に対する備えへの考え方を伝えられたらと思います。

日本マネジメント総合研究所合同会社 理事長 戸村 智憲



### 災害対策の創意工夫を

災害リスクへの対策は必要不可欠です。とはいえ、資金的に限りある中小中堅企業において、地震保険も値上げされるなかで、何をどこまで対応しておくべきで、どうすればお金をかけず災害対策の創意工夫で対応できるのでしょうか。

そこで本連載では、経営視点からのBCP(事業継続計画)、備蓄、実のある防災訓練などをはじめとする各種対策や、筆者が直面した欠陥住宅問題における耐震性・耐火性の欠如やリスクといった問題、日ごろから準備すべき対策などについて、順次解説させていただきます。この連載が少しでも「人にやさしく危機に強い経営」のお役に立てることがあれば、筆者として幸いです。

(つづく)